

飼育下におけるミナミコアリクイに適した食・住を考える

大谷 美穂子

(横浜市立野毛山動物園)

当園では2016年よりミナミコアリクイ (*Tamandua tetradactyla*) 1頭(雄 5歳)を飼育している。出生時、未熟児だったが比較的順調に成長し、当園に入園した。入園後も主だった体調不良は見受けられなかったため、体重・体温測定の実施により健康管理をしてきた。

入園以来、体重は増加傾向だったが、2019年1月より徐々に体重減少を認めた。しかし、一般状態は良好だったため、まずは給与飼料について再検討を行った。元々、食にうるさく、嗜好性の変化が多いので、大幅な飼料内容の変更は行わず、各分量を変更して給与した。しかし、それ以降、食欲が減退し、便秘を伴った。主食の採餌量が減ったことで、コアリクイにとって必要不可欠な繊維質が不足し、消化管運動が鈍ったことも考えられるため、整腸剤を投与したが状態は改善されなかった。

その後、血液検査を実施したところ、腎機能の低下と脱水を確認した。特に脱水が顕著だったため、補液(乳酸リンゲル液)を1週間行い、脱水は解消し、腎機能の低下もやや改善した。

ミナミコアリクイにおいて、腎不全の報告もあるが、当該個体についての数値は正常範囲内であるため、現段階での治療は行わず、腎不全予防の為に活性炭(吸着炭)を投与し様子観察している。

また、体調不良と同時期に飼育施設内のエアコン(加湿暖房機能付き)の不具合が生じ、獣舎内の湿度が極めて低い状態が続いた。今回の脱水は飼育環境の影響も考えられ、それが食欲減退や便秘にも繋がった可能性もある。

コアリクイについて、まだ飼育方法が確立されておらず、試行錯誤な状態で飼育管理をしているが、今回の体調不良を機に改めて、給与飼料や飼育環境が動物の健康状態を左右するものだと再確認した。特にコアリクイのような食性が特殊な動物は、野生と飼育下での飼料がかけ離れている場合が多く、少なからず給与飼料が起因している体調不良もあると思われる。

謎多き動物であるからこそ、早急な飼育方法の確立が必要だ。

